新刊紹介

清田啓子解説

江戸期漢文庶民文学類藪(三)

曲亭馬琴読本漢文体自序集

清田啓子氏は、大学の卒論のテーマに曲亭馬琴を選ばれて以来、ほぼ三十年にわたり、馬琴を中心とした江戸文学の研究を続けてこられた。氏の馬琴研究は、馬琴が「俗文学であると声高に主張するものに、何故ことごとしく漢文の序をつけるのか」との疑問から出発されたという。その根底には、その点にこそ、馬琴の特質、同時代における仮名表記と漢文表記のもつ深い文化的意味が見られるとの認識が潜んでいたに違いない。そして、以後も、こうした疑問にこだわり続けた同氏の馬琴研究の一つの着実な成果が、この本に確かに反映している、と言えるだろう。

馬琴の読本は、半紙本三十二篇、中本型八篇の四十篇。同氏による「解説」によれば、このうち「中本型読本八篇に漢文の序はなく、晩年読本界に君臨する時期に入ると、漢文以外の序が皆無に等しくな」るという。「半紙本読本三十二篇の序文は、自序のもの二十九篇、うち八篇が和文でしるされ、二十一篇が漢文のものであり、「馬琴の半紙本、中本に対する意識が、予想外に截然としていた」との確認がなされたわけだが、本書には、漢文でしるされた、馬琴のこれら二十一篇の序文が収録されている。

「解説」には、それぞれの初版、書誌、底本の所在など、簡単な内容が記されているが、それぞれが貴重な資料であるのみならず、馬琴の漢文でしるされた序文が、こうして一本にまとめられたことは、今後の馬琴研究にとって、大きな手助けとなるに違いない。また、同氏の妹さんであられる植田珠子氏、中国翻訳協会による、正確で丁寧な英語と中国語のレジュメも、最後にそえられている。

「この紙が樹として茂っていたころのすがたを想像し、多くの有形無形の御協力に対し心から感謝をささげます」の一節からは、清田氏のお人柄が思われよう。

参考のため、序文が収録された二十一篇の馬琴の作品の表題を、次に掲げておく。

月氷奇縁、復讐奇談稚枝鳩、石言遺響、四天王剿盗異録、新編水滸画伝、勧善常世物語、富士浅間三国一夜物語、椿説夕張月、雲妙間雨夜月、頼豪阿闍梨怪鼠伝、俊寛僧都嶋物語、松染情史秋七草、青砥藤綱摸稜案、占夢南柯後記、美濃旧衣八丈綺談、南総里見八犬伝、朝夷巡島記、皿皿郷談、近世説美少年録、松浦佐用媛石魂録・後集開巻驚奇俠客伝

(昭和六十三年六月三十日　朋文出版刊。二三二頁　三、八〇〇円)